

高等学校

平成 9 年 度

教育研究員研究報告書

芸術（音楽）

東京都教育委員会

平成 9 年 度

教 育 研 究 員 名 簿 (音 楽)

学 区	学 校 名	氏 名
2	東 京 都 立 深 沢 高 等 学 校	◎ 山 下 秀 和
3	東 京 都 立 永 福 高 等 学 校	村 重 庸 子
6	東 京 都 立 小 岩 高 等 学 校	佐 藤 勉
8	東 京 都 立 秋 留 台 高 等 学 校	渡 部 美 弥 子
8	東 京 都 立 多 摩 高 等 学 校	岡 田 暁 美

◎ 世話人

担当 指導部中学校教育指導課指導主事 根 岸 順 一

目 次

I 主題設定の理由	1
II 研究の構想図	2
III 研究の内容	
1 理論研究	
(1) 「音楽を親しむこと」について	3
(2) 「音楽的視野を広げること」について	3
(3) 授業改善の視点について	3
2 授業研究	
(1) 指導事例Ⅰ「ポピュラー音楽を利用したソルフェージュ指導の試み」	4
(2) 指導事例Ⅱ「打楽器を活用したリズム学習」	8
(3) 指導事例Ⅲ「リーダーを育成し、豊かな表現力を育てる合唱指導」	12
(4) 指導事例Ⅳ「パソコンを利用した創作指導の試み」	16
(5) 指導事例Ⅴ「箏の演奏を取り入れた日本音楽の指導」	20
IV 研究のまとめと今後の課題	
1 研究のまとめ	24
2 今後の課題	24

研究主題

音楽に親しみ、音楽的視野を広げるための授業の在り方

I 主題設定の理由

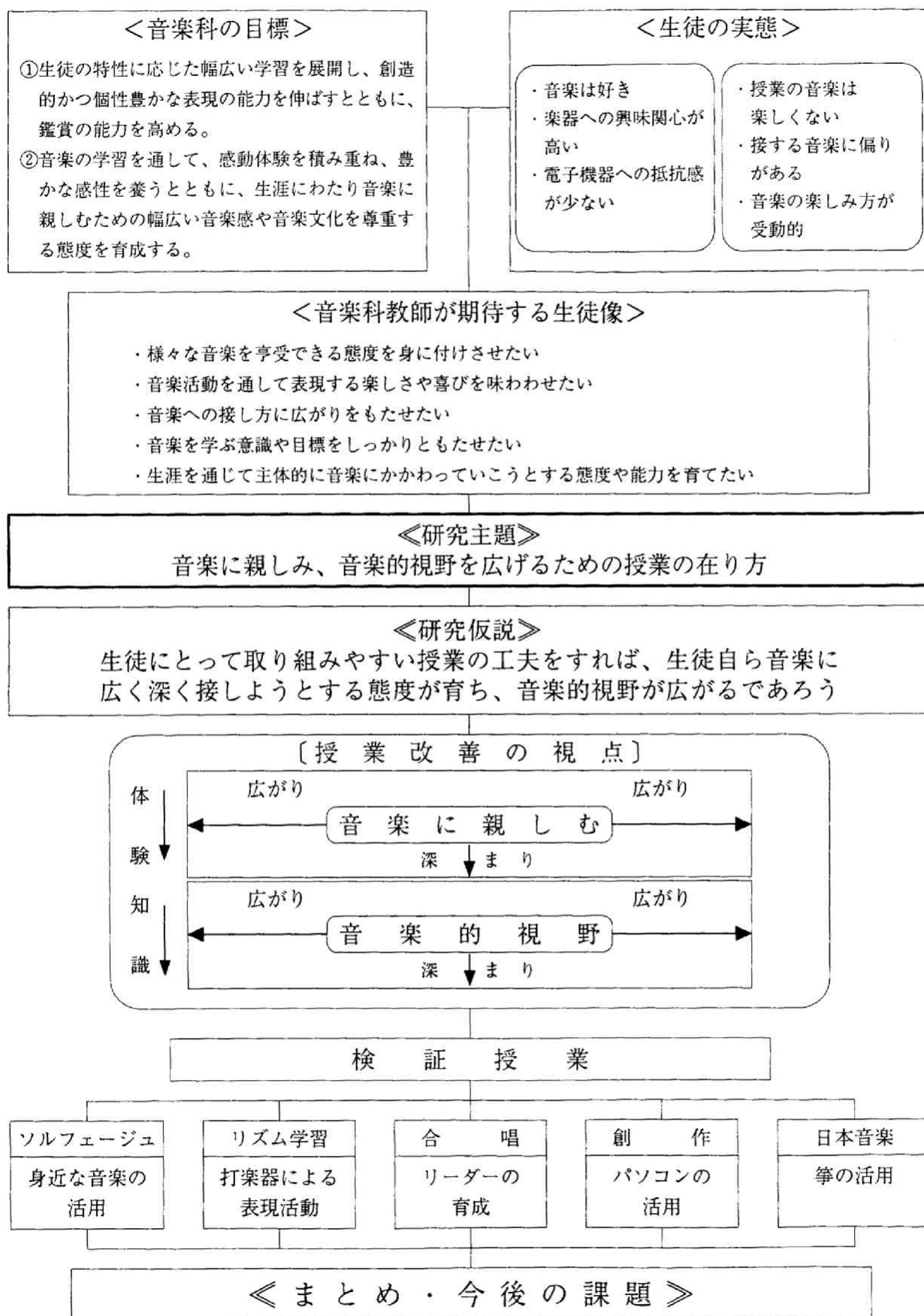
今日の日本の社会は日常的に多種多様な音楽に満ちあふれ、音楽の情報は膨大な量となっている。このような環境の中においては、経験が浅く音楽的価値判断の基準も十分に育っていない高校生の場合、触れる機会の多い身の回りの音楽を自分の好みの音楽と思いこんでしまうことは、ある程度やむを得ない。また一方では、音響機器の目覚ましい進歩と普及により、生徒は恵まれた環境の中で音楽に接しているが、自ら音楽を表現したり、集団で音楽を作り上げる喜びや感動を味わう経験が不足しがちである。

音楽は一時的な楽しみだけではなく、心に直接訴えかける特質をもっており、人間としての豊かな生活や精神的成長を助ける原動力ともなり得る。音楽の授業においては、生徒の接することの少ない分野の音楽を数多く聴かせたり、集団を通した音楽活動等から感動を味わったりすることで、様々な音楽のもつよさや価値を生徒一人一人に気付かせていくことが大切である。そのためには、教師主体の授業と生徒の活動が主体となる授業をバランスよく行うと共に、音楽に親しみやすい題材の工夫に視点を置いた授業を創造する必要がある。

高等学校学習指導要領の芸術科目の目標には「芸術的な能力を伸ばし、美に対する感性を高めるとともに、生涯にわたって芸術を愛好する心情を育て、豊かな情操を養う」と掲げられている。その目標を達成するためには、主体的に音楽活動を行おうとする態度や能力が必要不可欠であり、また活動を補完するための音楽的基礎力として、「授業において身に付ける知識や技術」という力と、「授業の中での感動体験が共感を呼び起こし、次への期待感へと広がっていく方向性」という力の両方が必要であると考えた。

そこで今年度の研究では、学校の授業が、これら音楽的基礎力を身に付ける機会を与え、生徒の音楽観の狭さや体験の浅さを補完し、音楽に対する将来的な姿勢にも影響を与えうると考え、「音楽に親しみ、音楽的視野を広げるための授業の在り方」を追求することとした。具体的には、最初に教材や指導法において生徒が取り組みやすい内容を工夫することで、様々な分野の音楽に親しめる体験をもたせたり、グループ活動等により生徒相互の影響も利用しながら興味・関心を引き起こしたりしながら、より広くより深い音楽的視野に基づいた基礎的知識を理解させる授業の進め方について考えた。これからの音楽の授業を考えると、音楽活動全般を幅広く理解する柔軟な姿勢が身に付き、永続的な楽しみを得られるような価値のある音楽をも選択できる力や真に創造的で個性豊かな音楽の能力を発揮する力を育てることが大切である。

Ⅱ 研究の構想図



Ⅲ 研究の内容

1 理論研究

(1) 「音楽に親しむこと」について

〈生徒が大きな声で一生懸命歌っている〉〈夢中で練習に没頭している〉〈音楽室を出て行く時、授業で練習した曲を口ずさんでいる〉〈授業で鑑賞した曲のCDを借りに来る〉等、いろいろな場面で生徒たちが音楽に親しんでいる様子が感じられる。

本研究では、それを更に一歩進めて、生徒がより主体的に音楽に取り組もうとする態度をもって欲しいと考え、「音楽に親しむ」ということを「広がり」と「深まり」の2つの面からとらえることとした。

「音楽に親しむ」ことにおける「広がり」とは、様々な音楽を体験しようとする態度を育てることであり、「深まり」とは、よりよいものを求めようとする態度を育てることであると考えた。

(2) 「音楽的視野を広げること」について

生徒が音楽に親しむという経験をすれば、音楽的知識が豊かになり音楽的視野が広がるのではないかと考え、「音楽に親しむ」と同様、「音楽的視野を広げる」ということを「広がり」と「深まり」の両面からとらえることとした。

「音楽的視野を広げる」ことにおける「広がり」とは、様々な音楽に応用発展することのできる力を育てることであり、「深まり」とは、ひとつの音楽をより深く追求することのできる力を育てることであると考えた。

(3) 授業改善の視点

指導事例 育てたい 資質・能力			ソルフェージュ	リズム学習	合 唱	創 作	日本音楽
体 験 ↓ 知 識 ↓ 体 験	親 し む	広がり 様々な音楽を体験しようとする態度	様々なジャンルの教材の活用	スネアドラムを使用したリズム音楽の実体験	様々なジャンルの音楽の導入	簡単な作曲の体験	伝統楽器に触れる
		深まり よりよいものを求めようとする態度	音楽を表現する諸要素の理解	リズム譜の理解 技術の習得	豊かな響き、美しいハーモニー、歌詞の理解、技術の習得	パソコン操作の習得、作曲の成就感	基礎的な演奏技術の習得
	知 識 ↓ 体 験	広がり 様々な音楽に応用、発展することのできる力	読譜や記譜能力の向上	重奏やピアノ伴奏を取り入れた多様なリズム表現の追求	より美しい音楽の追求	難しい段階への挑戦	日本音楽のもっているよさの理解
		深まり 一つの音楽をより深く追求することのできる力	音楽活動への音感覚の活用	音楽性豊かにリズム表現をする能力向上	より美しく音楽を表現する能力の向上	音楽を表現する諸要素の理解	日本的な音楽表現の追求
指導法の工夫			ポピュラー音楽の活用 読む、歌う、覚える、復元する活動の反復	グループ指導 年間を通しての継続的指導	選曲の工夫 リーダーの育成	パソコンの活用	進度別学習発表と相互評価

2 授業研究

指導事例Ⅰ ポピュラー音楽を利用したソルフェージュ指導の試み

音楽Ⅲ

1 題材設定の理由

読譜力がなくても、音楽を楽しむことはでき、音楽を聴いて感動するために、読譜力は必ず必要というものではない。しかし、自ら音楽に親しもうとしたり、未知の曲を知ろうとする場合、読譜力が必要である。読譜力を身に付けさせるには、生徒一人一人が興味・関心をもって授業に取り組めるような指導法を工夫することが大切であり、「親しみ、視野を広げる」ことを目標としながら、その達成のための一つとしてソルフェージュ指導（読譜、記譜力の育成）は有効であると考え。ソルフェージュ指導により、音楽の自己能力を一つ一つ蓄積していく過程では、音楽に対する認識の深まり、興味の広がりが可能である。音楽を分析的に見るので、音楽を要素から見た指導が可能である。

また、読譜力の育成は、生徒の自立的音楽活動を可能にする。これは生涯に渡って音楽を能動的に楽しむための基礎能力になる。

さらに読譜力は、知的理解であり理論的思考を助け、音楽理解の可能性を高める。

音楽授業の指導内容として有用であるにもかかわらず、授業であまり取り上げられることが少ない理由として、ひとつに年間の授業時数が少ないという問題であり、ひとつは生徒一人一人が興味・関心をもちにくく音楽嫌いを生む懸念である。

この読譜力や記譜力を育成するためには、時間的な制約もあり不十分な指導となりがちであるが、考え方を身に付けさせたり、自己学習ができるような資質を育てたりするような指導までは可能である。

音楽の授業に対する興味・関心を高めるためには、意義を明確に伝えることと、生徒が親しみをもてる題材を使用すること、機械的にならず、音楽のおもしろさを失わないように留意することで解決すると考えた。親しみのもてる題材とは、生徒にとって分かりやすい音調のもの、日常的なものが有効であると考え、ポピュラー音楽を中心として進めることとした。

生徒は既にある音感覚をもっており、読譜・記譜はできないにしても、それを表現する能力はもっている。この感覚に楽譜を一体化させ、知的理解と個別練習をし、一般化を図っていくことで親しみ、興味をもちながら読譜・記譜能力が育成され则认为、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) 身近で親しみのある楽曲を楽しみながら学習し、読譜・記譜能力を育成する。
- (2) 感覚的に行っていることを、知的に理解し楽曲体系の中に位置付ける。
- (3) ひとつの題材を多くの視点から分析、学習し音楽的視野を広める。
- (4) 反復練習によって十分習熟し認知を深め、音楽と楽譜を一体化させる。
- (5) 幾つかの課題を蓄積することで、読譜・記譜能力を育成する。

3 指導計画

(1) 学習の流れ

課題教材の歌唱による練習→音符の学習とリズム練習→音高読譜と階名唱練習→知的理解と部分練習→反復練習と記憶→楽譜に復元→他の構成要素の学習→次課題→蓄積→読譜・記譜力の育成

(2) 各要素の学習段階

A 音価（リズム）

- ① 音符、休符の楽典的理解
- ② 特徴的なリズムを取り出し、その分析とリズムのとり方の指導、練習
- ③ リズム感の養成
- ④ ②のリズムを使った課題のリズム打ち⇒読譜力の確認
- ⑤ ②のリズムを使った課題のリズム聴音⇒記譜力の確認

B 音高（メロディー）

- ① 階名唱で練習
- ② 特徴的なメロディーラインを取り出しその分析と音高（程）練習
- ③ 階名唱で反復練習し暗譜
- ④ 似たようなメロディーラインをもつ課題の視唱⇒読譜力の確認
- ⑤ 似たようなメロディーラインをもつ課題の聴音⇒記譜力の確認

C その他の要素の理解

D 歌として音楽的に表現する

4 仮説検証の視点

- (1) ソルフェージュ学習において親しみがあり、既知の曲を教材とすることが効果的かどうか。
- (2) 親しみのある曲を使用することによって、生徒がより積極的に、主体的に取り組むかどうか。
- (3) 限られた授業時間の中で、予定された学習をやりとげることができるかどうか。
- (4) 課題を習熟し、蓄積したものが他に応用できるか、一般化できるかどうか。

5 学習活動の展開（4時間扱い）

(1) 学習課題

- A 一拍3分割によるリズム
- B 順次進行による課題の読譜と視唱
- C 他の要素の学習
- D 歌唱表現

(2) 使用楽曲 「けんかをやめて」 竹内まりや作曲（1982年）

(3) 学習内容と流れ

学習内容と流れ	指導上の留意点
学習課題A 一拍3分割によるリズム ①基本的是一拍3分割によるリズムの理解とリズムのとり方	2分割・4分割等との

及び記譜法について

②リズム打ち（楽曲中から取り出す）

③3分割リズムの基本型と変形についての理解と練習

基本形		1・2・3形
変形 a 1		1・2形
a 2		1・3形
a 3		2・3形
変形 b 1		1形
b 2		2形
b 3		3形

④変形を含んだリズム打ち（楽曲中から）

⑤新曲課題のリズム打ち⇒読譜力テスト

⑥リズム聴音 ⇒記譜力テスト

ちがいを把握させる

一つ一つのパターンを
きちんと理解させ正確
に打てるようにする

三連符を正確に感じさ
せる

- ・親しみのある課題によることで生徒が自主的に取り組み、成果をあげたか。
- ・音符を理解し、3分割による色々なリズムを正確に表現できるようになったか

*ここでは3分割によるもののみを扱い、2分割・4分割等を含んだ、総合的なものは扱わない。

学習課題B 順次進行による課題の読譜と視唱

- ①音高を読む（跳躍進行の部分丁寧）
- ②階名唱（反復練習で暗譜する）
- ③特徴的なメロディーライン（こそでは順次進行）を使用した課題の視唱練習
- ④楽譜の復元
- ⑤この曲の特徴を生かした課題で新曲視唱⇒読譜力テスト
- ⑥この曲の特徴を生かした課題で聴音 ⇒記譜力テスト

導入時はゆっくり丁寧
に進める
反復練習は機械的にな
らないように配慮する

- ・親しみのある課題によることで生徒が自主的に取り組み、成果をあげたか。
- ・読譜・記譜能力が高まり興味をもち、意欲が高まったか。

＜更に視野を広め、深めるための学習＞

学習課題C 他の要素の学習

- ①形式
- ②この曲のコードについて（2時間授業の別の1時間はコードの学習を行っている）
- ③3分割のリズムで作られている音楽について

コード学習との関連を
はかる
色々な音楽に使われて

実際の作品の中から鑑賞・歌唱により他の用例を学習し更に理解を深め、視野を広める。 例 竹内まりやの他の作品・ボレロ・水戸黄門のテーマ ビビディバビディブー・津軽海峡冬景色等 唱歌にほとんどでてこないこと、最近のポップスにあまり使われないことの理由を考える。	おり、この学習の有効性と一般性を理解させる 音楽には時代傾向があることを理解させる
音楽的視野が広まり、一層、興味・関心をもつようになったか。	
学習課題D まとめと歌唱表現 ①正確さを保ちながら ②自由な表現で	一音一音に注意させる
理解が深まり、技巧が向上し、音楽的表現がより豊かになったか。	

6 考 察

3年選択の授業においてソルフエージュ指導を行った。この選択音楽は、音楽関係や、保育方面の進路を考えている生徒、及び自分の音楽活動のために音楽的能力を高めたいと考えている生徒を対象として講座を設置している。そのため、目的意識も明確であり、必履修の音楽授業とは在り方が異なり、3年の選択の授業として、年間を通してソルフエージュを指導内容とすることが可能である。

生徒の反応としては、授業中の学習活動を楽しみながら、よく取り組んでいた。ただ楽曲を暗譜したり、それを楽譜として復元することについては、負担が大きく内容的に難し過ぎるかもしれない。また、週一回という限られた授業時間では、毎週同じ事を繰り返したり、充分習熟したりしないうちに次の課題に進むことのないように、年間の指導計画を十分に検討し作成することが大切である。

このようなソルフエージュ指導において、どのような授業内容が可能であるか、また、生徒一人一人にどの程度までの目標を求めるかが課題として残った。しかし、仮に目標にしたレベルに到達できないにしても、音楽を分析し、考え、知的に理解し、音楽的視野を広げることができ、成果があった。

また、様々な思いで音楽を選択してくる1・2年の必履修の音楽の授業において、ソルフエージュ指導をどのような方法で取り入れていくかについて、今後研究を更に進めることも課題として残った。しかし、3年選択の授業において実践したことは、1・2年の授業に応用することも可能であり、授業をより豊かにするものと考えられる。今まであまり題材として取り上げられることの少なかったソルフエージュを工夫して興味・関心のある内容とし、授業内容のひとつとして取り入れていく必要があり、ソルフエージュの授業に色々な可能性があることも明確となった。

ソルフエージュ授業では、身近な楽曲による授業の改善が重要であるが、題材を何にするか、身近な楽曲からそれぞれの課題に適した曲をいかに選択するかが難しい。生徒にとって身近な音楽は時代とともに変化し、個々の生徒の差もある。本事例で成果が上がった曲も次の代では、身近さを感じなくなっていることもあり、どのような曲を選択するかが重要であり、今後の課題でもある。

身の回りにあるものを取り上げ、日常的なものを題材として、生徒一人一人が楽しみながら新しい発見を通して読譜・記譜力を高めることが必要である。

1 題材設定の理由

落ちついて授業を受けることが困難であったり、学習活動全般に対して自信や意欲を欠く生徒が入学当初に多々見られる場合、第一にいかにして授業内容を充実させるかが重要な課題となる。その点スネアドラムは、叩けば音が鳴るという性質上、楽器が苦手と思いこんでいる生徒に安心感を与え、また個人でバンド活動等を行っている生徒や主に流行曲を好む生徒にとっても身近で受け入れられやすい。そのため、授業に取り組む姿勢や音楽の能力にどうしても差がつきがちな一学年で実践する内容として、最も適した題材であると考えた。第二に、実際にスネアドラムの様々な曲を経験していくことによって、打楽器に対して親しみや新たなイメージをもたせると同時に、リズムという音楽の重要な基礎知識をも自然に体得させることが可能と考えられる。さらに楽曲を演奏する上で必然性から、読譜力や表現力についても学習効果が期待できると考え、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) スネアドラムの練習を通してリズム感を育てるとともに、読譜力・表現力など基本的な能力も身に付ける。
- (2) スネアドラムの演奏技術を学ぶことで、生き生きとした打楽器奏ができるようにする。
- (3) 一つの曲を仕上げる際の集中力や達成感を体験する。
- (4) ペアやグループによる重奏や合奏を通して協力する喜びや音を合わせて音楽を作ることの楽しさを知り、また同時に主体的に音楽活動にかかわる気持ちをもたせる。

3 指導計画

◆ 1学期（7時間扱い）

- ・スネアドラムの楽器のしくみとスティックの持ち方（持つ位置、トラディショナルグリップ、マッチグドリップ）について理解し、自分に合う持ち方を選択する。
- ・リズム譜上のR（右手）とL（左手）について理解する。
- ・4分音符・8分音符・16分音符（含休符）についての簡単な知識を説明しながら段階的に基本的な練習曲を演奏する。
- ・グループ毎に練習曲の達成度をチェックする。

◆ 2学期（8時間扱い）

- ・ウォーミングアップ用の練習曲を導入する。
- ・手首の柔軟性とスティックの弾ませ方に注意し、良い音色が出ているかを確認する。
- ・1つ打ち、2つ打ちと数を増やしながら、弾ませ方を学習し、ロールへと発展させていく。
- ・強拍と弱拍について学習しながら、ダウン・タップ・アップおよびアクセントやフラムへ発展させていく。
- ・演奏家の楽器奏法のビデオを参考にして、さまざまな演奏技術について学習する。
- ・3連符および8分音符と16分音符を組み合わせたリズムを数種類学習し、練習曲を演奏

する。

- ・二重奏の楽譜の読み方を学習し、曲の練習の後、ペアを組んで演奏を発表する。
- ・ピアノ伴奏付独奏曲を練習し、演奏を発表する。
- ・今まで学習したリズムを使用して創作活動（含楽譜を書く学習）を行う。

◆ 3 学期（5 時間扱い）

- ・ウォーミングアップ用の練習曲を継続し、発展させる。
- ・三重奏や四重奏曲を練習し、グループ毎に演奏を発表する。
- ・他の打楽器類も取り入れた合奏曲へ応用させる。
- ・アドリブについて理解し、曲の中へ応用させる。

4 評価の観点

- (1) 耳で覚えた演奏ではなく、音符や休符・拍子など知識面を理解して演奏しているか。
- (2) 曲にふさわしい演奏技術を用いて、表現豊かに演奏できているか。
- (3) 個人練習の時間やグループ内での協力を要する場で意欲的に活動しているか。

5 仮説検証の視点

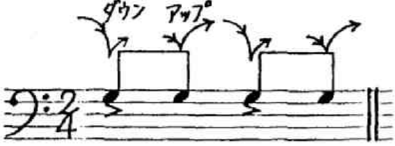
- (1) 親しみやすいスネアドラムを活用することで意欲的な活動が期待できるのではないか。
- (2) 演奏に必要という理由からリズムに関する知識やスネアドラムの演奏技術を学ぼうとする姿勢が見られるのではないか。
- (3) グループ活動にすることで互いに教え合うなどの協調性を発揮する場や、一人一人が主体的に活動しようとする場ができるのではないか。

6 学習活動の展開

1 学期（1 時間目）導入

指 導 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
・スネアドラムの説明 ・スティックの持ち方 ・R L の説明 ・練習曲	・他のタム類との比較で響き線について知る。 ・トラディショナルグリップとマッチドグリップの両方を学習し各自に合った持ち方を選択する。 ・楽譜の R（右手）L（左手）に注意しながら 4 分音符と 8 分音符（含休符）のみの簡単な曲を練習する。	・響き線の有無による音色の違いに気付かせる。 ・スティックの 3 分の 1 の位置を持つよう助言する。 ・全員が理解できるまで何度も練習させる。 ・机の角を打たないように指示する。
意欲的に活動しているか。リズム譜の基本が理解できたか。		

2 学期（2 時間目）

指 導 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
・ 強拍と弱拍の理解 (楽譜上の理論および演奏上のテクニックの学習)	・ 4 分の 2 拍子でダウン・アップ、3 連符でダウン・タップ・アップを練習しながら強拍と弱拍を学習する。 〈ダウン・アップ例〉  〈ダウン・タップ・アップ例〉  ・ トレーニング曲集を練習する。 ・ 楽譜の読み方を学習する。 ・ 全体を上下パートに分け自分のパートの音符を記入してから練習を始める。 ・ パート別に練習した後全員での合奏をする。	・ 強拍の時にスティックをスネアの表面に押しつけとヘッドの振動を妨げないように助言する。 ・ アクセントをつけるために高い所から腕の重みを利用して落とす。→ダウン ・ 次にアクセントを打つためにスティックを高くあげる動きをする。→アップ ・ アクセントが付かない場合はスティックの振幅は狭くなり装飾音符を打つ場合と似た状態になる。→タップ ・ 固い動きや音に注意させる。 ・ 上下それぞれのパートの音符や休符の見方を学習させる。 ・ 学習した演奏技術を用いるよう指示する。 ・ RL と強拍弱拍との関連に注意させる。 ・ 二重奏の演奏見本を示す。
・ 練習曲 ・ 二重奏曲	学習した演奏技術を曲の中に応用しようとしているか。	

2 学期（5 時間目）

指 導 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
・ 練習曲 ・ ロールの理解	・ トレーニング曲集を練習する。 ・ スティックのヘッドを落として弾む感覚をつかみ徐々に左右交互に弾ませロールにつなげる。 〈ロールの練習例〉 	・ 手首の柔軟性や既習の指導内容に注意させる。 ・ 一回のストロークで 5 ～ 6 個以上の音のつぶを鳴らす。 (音は減衰していく)

・ 伴奏付独奏曲 〈スペイン〉 CHABRIER作曲	 ・ 4分音符や8分音符をロールにする際のスティック使いを学習する。 〈練習例〉	・ 左手がロールになりにくいこのを助言する。 ・ 指の支点をしっかりとらせヘッドがぶれないようにさせる。 ・ スティックを持つ場所が少し移動するだけでも弾み方が違うことに注意させ最も弾む場所を探させる。 ・ 短い音符は手首を中心に使い長めの音符は肘から先を使い上下の運動を少し大きめにするよう指示する。 ・ ロールの音符とロールではない音符のスティックづかいの違いに注意させる。 ・ 4分の3拍子の強弱に注意してRLを記入させる。 ・ 同パターンの繰り返しであることに気付かせる。
	・ 楽譜にロールで実際に打つ音型とフラムのRLを記入してから練習する ・ 全体の曲の構成を調べる。 ・ 伴奏に合わせて演奏する。	

伴奏と合わせようと努力しているか。アンサンブルに親しんでいるか。

7 考 察

生徒全員が楽しく活動できる内容をとの思いから取り上げたスネアドラムへの生徒の反応は良好で、特に男子生徒の積極的な姿勢は予想を上まわるものであった。スネアドラムの演奏技術習得と平行して行われるこのリズム学習は、最も簡単な段階から開始し、楽譜が読めない生徒の導入での負担を少なくした上で、曲の演奏を通して徐々に楽譜上のリズムやその他の基礎知識を理解させていく指導計画になっている。スネアドラムの演奏は一見簡単に思われがちだが、長期間訓練しなければ得られない技術もあり、リズムを学習させる進捗には合わせやすい。ただいかに段階を踏んで指導しても遅れがちな生徒もいるため、グループ学習による工夫やゆるやかな進捗での指導が欠かせない状況である。しかし継続して学ぶことで、いかなる生徒も演奏技術の上達や併せてリズムの知識・表現力等が確実に深まっている。このことは生徒本人の音楽に対する自信や意欲につながり、音楽を生涯愛好する気持ちの基盤になり得ると期待できる。今後は民族楽器を含む様々な打楽器を使用しての合奏などにも発展させていく。

1 題材設定の理由

あらゆる音楽活動の中で、「歌うこと」は基本であり、特に音楽の授業において「合唱」は、皆で一つの曲を作り上げていくという集団ならではの意義深い活動である。合唱を通じてアンサンブルの魅力に気付かせ、音楽の喜びや感動体験を味わわせること、また、音楽を通して人と人との結びつきを強めていくことは学校教育の中で非常に重要なことである。

しかしながら、一方では、最近の生徒の音楽の楽しみ方は多様化しており、音楽を身近なものとして親しんでいながら、人と一緒に歌ったり、合唱したりすることに無関心な態度を示す傾向がある。個人的に好みの音楽を聴くことや、カラオケなどで歌って発散することはあっても、合唱などに意欲的に取り組む姿勢はあまり見られない。一般的な傾向として合唱人口が減少し、また生徒が授業の中で歌わなくなったとよく言われているのも、このような状況を反映しているものと考えられる。

従って、授業で合唱を扱う場合、個人の趣味に起因すると思われる音楽的経験の違い、また、それまでの学校教育での音楽体験の違いによって、生徒の能力差が広がってきていること、さらに別の観点からは、合唱を作り上げる上で重要なリーダー的人材が乏しくなっており、これらの課題を一つ一つ解決することが、音楽の授業を充実させることにつながっていく。

そこで、合唱の授業の導入において親しみやすい教材を工夫することにより、生徒たちに合唱に対する興味をもたせたり、また、リーダーを育成したりすることにより生徒の活動を充実させ、パート練習等を活性化しながら合唱の基礎力を高めたいと考え、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) 合唱に親しませ、合唱の楽しさや喜びを味わわせる。
- (2) よりよい合唱表現をするために必要な技術を習得する。
- (3) 各パートの役割を理解し、指揮者やパートリーダーを中心に合唱の表現を考え、生徒一人一人の意識を高める。
- (4) 生徒相互のコミュニケーション、協調性を育成する。
- (5) 豊かな響き、美しいハーモニーを追求する。

3 指導計画（対象：1学年）

◆1学期（8時間扱い）

- ・既習曲や、平易な斉唱曲を題材に、声を出すことに慣れさせる。
- ・呼吸法や発声法の基礎を身に付けさせる。
- ・自分の声の適性を知り、声域を理解させる。
- ・四声体のカデンツの指導をする。

教科書の中から、既習曲を数多く歌わせ、発声についての基本的なことを指導していく。特に呼吸法に関しては、入学時ほとんどの生徒が腹式呼吸をできないのが現状であり、パート分けの時に、呼吸法を個別に指導していく。「エーデルワイス」「愛のコーラス」等、二部合唱や部分合唱曲を教材に合唱を導入する。パート練習は、場所を分散させず、全体の中で行っていくなどについて、配慮することが大切である。

◆ 2 学期（8 時間扱い）

- ・発声の基礎技術の向上をはかる。
- ・パートリーダーの役割を認識させ、パート練習を充実させる。
- ・ア・カペラの合唱に挑戦する。
- ・色々な合唱形態や、合唱曲を知る。→色々な合唱曲の鑑賞。
- ・「はるかな友に」「さよならみなさま」「大地讃頌」等の教材を合唱する。

合唱の基本をある程度習得したところで、パートリーダー中心のパート練習を設定したり、ピアノの弾ける生徒のいないパートには、音声多重CDや、録音機能の付いたキーボード等の機器を利用したりして、自主的な練習ができるような環境をつくる必要がある。

教材を選曲する場合、短く単純なもの、繰り返して練習ができるような魅力あるもの、呼吸法の勉強になるものを視点とすることが大切だと考える。そして、曲のイメージをもたせ、どういう表現をしたらよいか等について、パートリーダーに話し合わせ、全体で合唱した時に問題点を出し合い、適宜、教師が援助していくことが必要である。

◆ 3 学期（6 時間扱い）

- ・よりよい合唱表現をするための技術を高める。
- ・指揮法を指導し、指揮者のリーダーとしての役割について理解させる。
- ・指揮者、ピアニスト、パートリーダー等との連携をはかり、皆で協力して作っていく音楽のすばらしさを味わう。
- ・より高度な合唱曲に挑戦し、表現を追求する。

4 評価の観点

- (1) 全体がまとまって練習しているか。曲の完成度はどうか。
- (2) 生徒の自主的活動としてのパート練習がきちんとできているか。
- (3) パートの中での個人の練習の取組みはどうか。
- (4) ア・カペラで合唱ができたか。
- (5) 指揮者、パートリーダー等がリーダーシップを取っているか。
- (6) 合唱に親しみ、更に発展させようとする姿勢が見られるか。

5 仮説検証のための視点

- (1) 親しみのある曲を教材として使用することによって、生徒が積極的に授業に取り組み、合唱の基礎力を高めることができるのではないか。
- (2) 生徒の自主的活動を重視していくことにより、より効果的な合唱練習ができるのではないか。
- (3) 合唱の基本を学ぶことで、さらに高い次元のアンサンブル活動に意欲的に取り組むのではないか。

6 学習活動の展開（2学期 第6時）

	活 動 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点 ・ 方 法
導 入	発声練習をする。 ①準備体操 ②腹式呼吸 ③ハミング ④母音での発声 ⑤既習曲の復習 ・エーデルワイス ・サウンドオブミュージック 他	充分声が出るようウォーミングアップさせる。 ・上下の歯を軽く合わせ、お腹からプレスをS音等で直接歯に当てさせる。 ・1回のプレスで拍数を変えながらお腹の支えをとらせる。 ・2度～3度音程で発声練習をさせる。 ・口形に注意させる。 ・歌詞を明瞭にさせる。	歌うことへの動機付けはできたか。 { 手をお腹等に当てて確認 } { 肩が上がらないか等 } ・よく響く声が出ているか。 ・充分声が出ているか。
展 開	①自分たちの演奏を聴く。 ・前回録音した「はるかな友に」のテープを聴く。 ・感想や改善点を述べ合う。 ②パート練習をする。 「はるかな友に」 ・「大地讃頌」の音取り ・ピアノ・キーボード、テープ等を使用	・生徒自身に課題を見付けさせる。 ・意言や感想が言えるような雰囲気を作る。 ・パートをまわり、適切な助言をする。	課題意識をもって自主的に授業に取り組んでいるか。 ・興味をもって演奏に耳を傾けているか。 ・パートリーダーが練習の視点をとらえているか。 ・全員が話し合いに参加しているか。 ・意欲的、協力的にパート練習をしているか。 ・表現を追求しているか。 ・パートリーダーが、リーダーシップを発揮しているか。
ま と め	①「はるかの友に」「大地讃頌」の合唱をする。 ②各パートで反省点をまとめ、リーダーが発表する。 ③「さようならみなさま」の合唱をする。	・ハーモニーやバランス等、気をつけながら歌わせる。 ・次回への目的意識をもたせる。 ・楽しく合唱する雰囲気を作る。	パート練習の成果が生かされているか。 ・全体のハーモニーを聴きながら歌っているか。 ・リーダーの反省をよく聞いているか。 ・合唱を楽しんでいるか。

7 考 察

中学時代に合唱経験を豊富にもつ生徒が少ない場合、歌唱技術が充分ではないため、正しいピッチが得られず調和のとれたきれいな響きになりにくい、他のパートにつられやすい、また、リーダー的人材が育っていない等の問題をかかえているのが現状である。歌ってもきれいに響かなければ充実感がなく、合唱に対する興味もうすれていくということにもなりがちであり、日ごろより発声の基本やハーモニー感を身に付けさせる必要性がある。



本事例における生徒の反応は、教材とした曲について半数以上の生徒が「歌いやすい」、「好き」と答えており、逆に「嫌い」と答えた生徒は少なかったことから「親しむ」という点での導入の工夫としては概ね成功だった。ただ、合唱の完成度としては、短期間で歌唱の基礎力を高めることは困難なことであり、質の高い仕上がりになっていなくてもある程度やむを得ないと考える。

リーダーの育成については、指揮者やパートリーダーの人材が少ない場合、教師主導で練習を進めがちであるが、生徒に考えさせたり、工夫させたりしたことは大変よかった。初めはパートリーダーがリーダーシップをとれず、スムーズに練習ができないという状況もあり、パート練習が機能するためには教師側で練習のプログラムを組んだり援助したりすること等は必要であった。特に男子の練習が定着するまでに時間がかかったものの、最終的には生徒だけで各パートが自主的に行えるようになり、リーダーとしての自覚も徐々に出てきたようである。練習の手段として、ピアノ以外の音響機器の利用も大変効果的であった。また、生徒の指揮で合唱する場合、時間をかけて指導する必要があったが、自分たちで作りあげるという意欲を引き出すには有効であった。

練習が進むにつれ、音の間違いを指摘する者や互いに教え合う姿等も見られるようになり、各パートとも活気があって徐々にではあるが表現力、集中力も出てきた。また、自分たちの歌った録音を聴き、改善点についての意見を言えるようになるなど生徒一人一人の成長ぶりも評価できる。当初、混声三部で始めた曲が授業の終わりの歌として定着し、四部で生き生きと歌えるようになったことも一つの成果である。まだ安定性に乏しいが、ア・カペラで歌うことも可能になってきた。

また、各パート1～3名の小グループで歌わせることも効果的な方法であり、他のグループの演奏に興味深く聴き入る姿は、合唱に対する意識が高まりつつあるためと考えられる。「聴く」、「歌う」という過程を色々な観点から繰り返し、それが生徒同士の人間関係の中で生かされる時、充実した合唱活動ができる。

さらに、歌唱技術を向上させることにより、より豊富な合唱体験をさせながら表現力を高めていくことが今後の課題である。

1 題材設定の理由

音楽的な基礎力が十分身に付いていない生徒の中には、「楽譜」が授業のあらゆる面で壁となる場合が多い。生徒たちにとって「楽譜が読めない、わからない」ということが「音楽の授業が面白くない、やらされている」という感覚につながる一つの要因だと考えられる。また一方で、音楽は生徒たちの生活の中にはなくてはならない身近な存在である。アンケートをとると「音楽は好き」と答える生徒が殆どである。しかしそれは、自分の好きな音楽や気に入った音楽を「聴くだけ」という受け身的な場合が多い。音楽科の教師にとって、もっと生徒たちに自ら音楽に対してアプローチしていくような広がりをもってもらいたい、それにはどうしたらよいか課題の一つである。

最近、パソコンを活用した授業実践が多く紹介されているが、テレビゲーム世代の生徒たちは、比較的抵抗なくパソコンに触れることができるようである。そこでパソコンを使いゲーム感覚で学習を進めていく中で、生徒たちの楽譜に対する苦手意識をなくし、音楽的な基礎力を少しでも身に付けさせることができるのではないかと、また、繰り返し聴いて確かめながら入力する活動を通して生徒一人一人が自分の作品のイメージを実感としてつかんでいくことができるのではないかと考え、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) パソコンを使った音符入力により楽譜・読譜に慣れる。
- (2) コード進行と旋律の関係を知る。
- (3) 入力した旋律や伴奏を聴いて確かめながら進めていくことにより、創作意欲をもたせる。
- (4) 自分の作った単旋律にアレンジを加えていくことで、より曲のイメージを豊かにもたせ、音の広がりを感じとらせる。

3 指導計画（対象：2 学年／18時間扱い）

◆第1次（5時間）

- ・パソコンソフトの基本操作の説明・演習
- ・コードネームとその構成音の復習（基本的な3和音のコードネームは1年で既習）
- ・和音構成音を使って旋律を作る練習
- ・経過音、刺繍音を加えて旋律を作る練習

◆第2次（12時間）

- ・決められたコード進行（24小節）に和音を入力
- ・旋律を作り入力
- ・タイトル決めの音色・テンポの設定
- ・アレンジデータの読み込みと貼り付け

◆第3次（1時間）

- ・仕上がった作品を録音、発表

4 評価の観点

- (1) 「入力⇄聴く」という活動に集中できたか。
- (2) 和音の響きにあった旋律を工夫できているか。
- (3) 自分の曲にイメージをもち、音色・アレンジを選べたか。

5 仮説検証の視点

- (1) パソコンという媒体を利用することにより、音楽的基礎力が十分身に付いていない生徒にも、創作する楽しさを味わわせることができるのではないか。
- (2) 入力するという作業を通して、音符価値やコード進行等について自然に学習することができるのではないか。
- (3) パソコンで「入力⇄聴く」という活動をするを通して、自分のイメージを音楽で表現できる楽しさを味わえるのではないか。

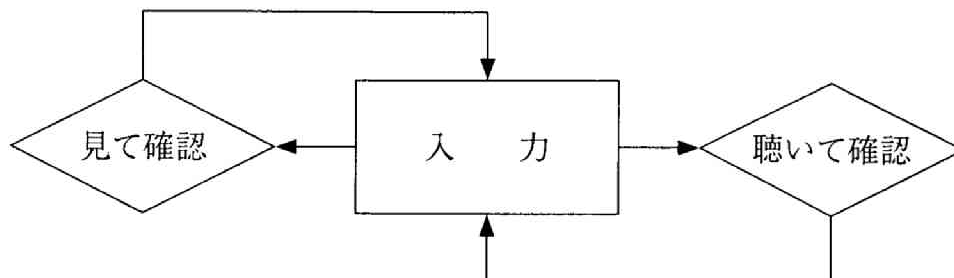
6 学習活動の展開

指導内容	学習活動	指導上の留意点
【第1次】 パソコンソフトの基本操作を理解させる コードネームの復習 和音入力の練習	・起動、スコアエディタ、プレイヤーウィンドウの使い方等を練習する。 ・入力（準備）してあるコードネーム記号を〔和音入力〕で設定しながら音符に入力する。 ・保存し、プリントアウトする。	・新しいソフトの使い方に慣れさせる。 ・指定されたトラックに入力させる（Track 5）。 ・コードネーム（記号）の構成音を確認させる。 ・根音、メジャー、マイナー、と選択していくことでコードネームの理解を深めさせる。
・コードネームの構成音を確認できたか。		
構成音でメロディを作る練習をさせる 経過音・刺繍音の説明 機械音以外の音も使ってメロディーを作る練習をさせる	・教師のサンプルをモニターで見ながら聴く。 ・入力した和音の構成音を使ってメロディを入力する。 ・教師のサンプルをモニターで見ながら聴く。	・拍のグリッド線を手がかりに音符の長さを考えさせる。 ・A－A'の形式に注目させる。 ・指定されたトラックに入力させる（Track 6）。 ・旋律の流れがスムーズになるよう意識させる。 ・和音進行と旋律がとけあっているか確認させながら入力させる。 ・構成音以外の音を使用すると旋律が豊かになることに気付かせる。

・ A - A' の形式を意識できたか。 ・ 和音進行の響きを聴きながら旋律を考えられているか。		
【第2次】		
説明	・ 24小節の構成について説明を聞く。	・ イントロ～A - A' - B - A' ～エンディング (A') の形式に注目させる。
和音の入力	・ 新しいソングファイルを開く。	・ これから新しい作品に取り組む意識をもたせる。
メロディの入力	・ 入力（準備）してあるコード進行を【和音の入力】で設定しながら音符になおして入力する。（24小節） ・ 既に入力してある和音の響きを聴きながらメロディを入力する。	・ 指定されたトラックに入力させる（Track5）。 ・ 同じパターンの繰り返しには「コピー」と「ペースト」を利用して入力作業の簡略化をはかる。 ・ 指定されたトラックに入力させる（Track6）。 ・ A - A' - B - A' を意識させて旋律を作るようにさせる。
・ A - A' - B - A' を意識できているか。 ・ 和音の響きにあった旋律を工夫できているか。		
音色・テンポの設定	・ 自分の作品にタイトルをつけイメージにあった音色・テンポを選ぶ。	・ 自分の作品に具体的なイメージをもたせる。
アレンジデータの読み込みと貼りつけ	・ いろいろなアレンジデータを読み込んで聴く。 ・ 自分の作品のイメージにあったアレンジデータを選ぶ。 ・ アレンジを貼りつける。	・ アレンジデータの構成を理解させる。 （イントロ、アレンジ1、アレンジ2、エンディング） ・ アレンジパターンだけを貼りつけることに注意させる。 （アレンジデータはパターンとコードから成り立っている）
・ 自分の作品にイメージがもてたか。 ・ 自分の作品にあった音色・テンポ・アレンジを選べたか。 ・ イントロからエンディングまでの流れを感じとれたか。		

【第3次】 発表	・お互いに作品を発表し聴きあう。 ・友達の作品のよかった点、自分の作品の工夫した点をまとめる。	・同じコード進行でも様々な曲ができることに注目させる。
-------------	--	-----------------------------

【入力作業における生徒の活動】



7 評価の工夫例

() 年 () 組 氏名 ()

() 年 () 組 氏名 ()

《『パソコンで作曲』に挑戦！...した後に》

(1) パソコンを使って作曲する活動はどうでしたか？
【 とても楽しかった。つまらなかった。どちらともいえない。 】

(2) 指定されていたコードネームの構成音が何の音か分かるようになったと思いますか？
【 よく分かるようになった。 だいたい分かった。 まだよく分からない。 】

(3) 入力作業を通して、音符の種類とその読み方が分かるようになったと思いますか？
【 よく分かるようになった。 何となく分かった。 まだよく分からない。 】

(4) 「入力」作業というパソコンの操作は、あなたが作曲する上で役に立ちましたか？
【 分かりやすかった。 分かりにくかった。 どちらともいえない。 】

(5) またいつか作曲に挑戦してみたいと思いますか？
【 はい。 いいえ。 どちらともいえない。 】

《『パソコンで作曲』に挑戦！...した後に》

(1) パソコンを使って作曲する活動はどうでしたか？
【 とても楽しかった。 つまらなかった。 どちらともいえない。 】

(2) 指定されていたコードネームの構成音が何の音か分かるようになったと思いますか？
【 よく分かるようになった。 だいたい分かってきた。 まだよく分からない。 】

(3) 入力作業を通して、音符の種類とその読み方が分かるようになったと思いますか？
【 よく分かるようになった。 何となく分かってきた。 まだよく分からない。 】

(4) 「入力」作業というパソコンの操作は、あなたが作曲する上で役に立ちましたか？
【 分かりやすかった。 分かりにくかった。 どちらともいえない。 】

(5) またいつか作曲に挑戦してみたいと思いますか？
【 はい。 いいえ。 どちらともいえない。 】

《『パソコンで作曲』に挑戦！発表会！リスニングノート》

①あなたが良かったと思う友達の作品を1つ挙げてください。
() 年 () 組 氏名 () の作品
タイトル『 ありんこ 』

②どんなところが良かったと思いますか？具体的に書いてください。
あり ありきまのイメージがでてよかった。
ゲンカ りとくがかわいかった。

③パソコンで作曲に挑戦した授業を振り返って、あなたの感想を自由に書いてください。
とても楽しかった。
まだやりたいたい。

《『パソコンで作曲』に挑戦！発表会！リスニングノート》

①あなたが良かったと思う友達の作品を1つ挙げてください。
() 年 () 組 氏名 () の作品
タイトル『 じとん 寂 』

②どんなところが良かったと思いますか？具体的に書いてください。
*何となく好き。何となくイメージが湧いてきた。
*それがこの曲にあってる感じがする。

③パソコンで作曲に挑戦した授業を振り返って、あなたの感想を自由に書いてください。
すごく楽しかった。もしまたやる機会があればいいかな。
次はもっといい曲を作りたい。

8 考 察

事前のアンケートによると『パソコンに興味をもっている』と答えた生徒は半数以上であった。また、『パソコンを使って作曲する活動はどうだったか』には約7割の生徒が「とても楽しかった」、『“入力”聴く」というパソコンの作業は作曲する上で役立ったか』には「分かりやすかった」と約半数の生徒が答えている。実際に生徒たちは驚くほど集中して活動しており、楽譜に苦手意識をもっている生徒たちにとってパソコンの利用は大変有効であったといえる。さらに、この授業に入る前には「作曲に興味をもっている」と答えた生徒は3割程度しかいなかったが、作品ができ上がった後には半数以上が「また作曲に挑戦してみたい」と意欲を示している。また自分のイメージを音楽に表わしていくという広がりをもった「入力」聴く」という作業を通じてある程度導き出せたことは、最後の発表会での生徒の反応からうかがえた。

一方で課題もいくつか残った。操作しやすいソフトの選定も重要なポイントである。パソコンソフトの操作の理解に時間がかかったこと、音符価値を理解し正しく記譜できるようにする指導上の問題点等、今後、工夫・改善していかねばならない。

1 題材設定の理由

様々な音にあふれた現代社会の中で生活している生徒たちが、日本音楽という面からみると、ほとんど無縁であり、知らないままにつまらないもの、あるいは自分には全く関係のないものとしてやり過ごしているのが現状である。これは、世界中のあらゆる種類の音楽を多様な手段によって耳にすることが可能になった現在、身近であったはずの日本音楽が、日常生活の中から遠ざかり、希薄化が進んでいる状況にあるためと考えられる。レコード店などでも日本音楽の作品のコーナーはわずかしがなく、LDにいたっては学校教材用に作られたもの以外種類も少ない。

しかし、今後さらにグローバル化していく国際社会において、日本の伝統文化に対する理解という点からも、生徒たちに日本音楽を指導し、授業の中でもっと日本音楽に触れさせていくことが必要である。お正月のテレビ番組などの他、日常的にあまり箏の調べなど耳にしたこともない生徒たちに箏の曲を聴かせると、ほとんど全員が「何となく日本的で、落ち着く」とか「箏特有の音色がきれい」等、肯定的な反応を示す。このことから、生徒たちは日本音楽に触れる機会が少ないため、自ら日本音楽を自分の生活にとり入れようとする気持ちが少ないだけであり、生徒たちの中にも日本音楽を受け入れる感性は十分にあることがうかがわれる。

すでに小・中学校でも、日本音楽の鑑賞が行われているが、日本音楽のよさを生徒たちに更りよく深く実感させる必要がある。そこで、実際に自分で箏を演奏するという直接体験を通して、生徒たちにその楽しさ・難しさ・奥深さ等を理解させ、日本音楽のよさを体得させようと考え、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) 日本音楽をより身近なものと感じさせる。
- (2) 日本の伝統楽器（箏）のもつよさを実感させる。
- (3) 日本音楽のもつ余韻などの美しさを感じとらせる。
- (4) 箏による合奏（二重奏）の美しさ・楽しさを味わわせる。

3 指導計画（対象：2学年 17時間扱い）

◆第1次（5時間）「『さくら』（平調子）を弾けるようになろう」

- ・ 箏曲「千鳥の曲」を鑑賞し、箏の美しさを知る
- ・ 基本的な箏の手法を学習理解する
 - 箏のしくみ
 - 絃名について
 - 箏爪について
 - 箏の楽譜の読み方
 - 基本的左手の手法 押し手・弱押し・強押し
 - 基本的右手の手法 合わせ爪・かき手・割り爪
- ・ 初歩的な練習曲を弾く
- ・ 「さくら」を練習する

◆第2次(12時間)「各自の興味・関心に合わせて、箏の演奏能力をのばし、日本音楽のよさを感じよう」

・箏の多様な手法を学習する

左手の手法 後押し・掛け押し・つきいろ・ひきいろ・けし爪

右手の手法 すくい爪・かけ爪・半かけ爪・押し合わせ・輪連・引連・すり爪・波返し・散し爪・トレモロ・裏連・流し爪・ピチカート・スタッカート・グリッサンド・アルペジオ

・柱(じ)の立て方を理解し実施する

・平調子に合わせる(調絃)

・楽譜を見ながら、箏曲「六段」を鑑賞する

・「荒城の月」(第一箏、第二箏)や「さくら変奏曲」(第一段)を練習する

・いろいろな日本音楽(尺八、三味線、琵琶、笛、太鼓、雅楽等)を鑑賞する

・箏の二重奏などに取り組む

・自分の練習の成果を発表する

4 評価の観点

- (1) 日本の伝統楽器に親しみをもって触れているか。
- (2) 箏の基本的な演奏技術の習得に興味・関心をもっているか。
- (3) 日本音楽独自のよさを理解しようとしているか。
- (4) 日本的な音楽表現を追求しようとしているか。

5 仮説検証の視点

- (1) 箏という楽器の授業への導入が、生徒にとって取り組みやすい授業となり得ているか。
- (2) 箏という楽器に生徒が興味・関心をもって演奏しているか。
- (3) 箏の練習をしていることが、他の伝統楽器に対する興味を喚起しているか。
- (4) 箏を実際に弾くことによって、日本音楽がより身近なものとなっているか。

6 学習活動の展開(第2次 8時間目)

	学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点
導 入	・ 笛の曲「一夜月」を鑑賞する。	・ 楽器の特徴をしっかりと聴きとらせる。	・ 日本音楽に興味・関心をもっているか。
	・ 鑑賞記録に感想を記入する。	・ 日本音楽独特の美しさを感じとらせる。	・ 日本音楽独特の美しさを感じているか。
	・ 箏を弾く用意をする。 立奏台、譜面台		
	・ 平調子に調絃する。 (柱をたてる)	・ 音の聞き取りに慣れさせる。	・ 正しく調絃されているか。

展 開	・「荒城の月」「さくら」などの曲を箏で練習する。	・箏特有の音色の美しさや多様な手法に関心をもたせる。 ・箏の演奏技術を向上させるように取り組ませる。 ・二重奏などに取り組ませる。	・箏特有の音色の美しさを感じているか。 ・箏の多様な手法を理解しているか。 ・箏の演奏技術の向上にすすんで取り組んでいるか。 ・合わせる楽しさを感じているか。
ま と め	・練習の途中経過を披露する。 ・感じたこと、気付いたことを記入する。	・人前で演奏することもよい経験になることを理解させる。 ・自分の演奏に活かせるように考えて聴かせる。	・他のグループの演奏を興味をもって聴いているか。

7 日本音楽の指導における評価の工夫例

日本音楽に慣れ親しませるためには、箏や尺八、三味線などを用いた演奏活動や創作の授業LD等を活用した鑑賞の授業等が行われている。このような日本音楽の授業においては、楽器の独特の響きや演奏法、リズム等が理解できているか、また、興味・関心や意欲が高まり生徒自らが日本音楽について調べてみようとしているか等について、評価する必要がある。

そのためには、観察法や記述法を用いたり、演奏発表に対する相互評価を活用したりして、生徒一人一人の関心・意欲・態度を適切に評価することが考えられる。

右の鑑賞記録は、箏の面数が少ないため、
箏の練習と笙についての課題学習及び鑑賞
をグループに分けて平行して行った授業で、
記述法を工夫した例である。

[illegible]

8 考 察

音楽の授業においては、歌唱・器楽・鑑賞が3つの柱であり、日本音楽における器楽の取組みとして、生徒たちが簡単に弾けて楽しめる箏を授業に導入することにした。箏は、美しい音色が出せるようになるまでにかなりの練習を要するヴァイオリンのような楽器と違い、弾けば誰にでも箏らしいきれいな音色が出せ、それなりの満足感が得られ、授業で生徒たちに取り組ませるには適当な楽器である。

箏の実物を実際に見たことのない生徒も多く、最初は箏を自分で弾くなどとは思ってもいなかった生徒たちも、毎時間取り組んでいくうちにだんだんの箏になじみ、上手く弾けるようになればなるほど箏を弾く楽しさを実感していた。

最初に箏を弾かせる際の問題点としては、箏をギターと同様に弦をはじいて音を鳴らす楽器という印象の強い生徒が多く、箏爪で弦をはじいてしまう場合が見られた。それには、無理なく弦を押さえて弾けるようになる初歩の練習曲を作って学習させることにした。また、生徒に使わせる箏爪は数多く用意したが、自分に合うものを見付け出すのに結構時間がかかり、個人用の箏爪の購入等の考慮が必要であろう。しかし、どの様に演奏しても容易に日本的な音色が出るため、トレモロをしてみたり、つま弾いて楽しんだり、様々な工夫をしながら練習に取り組む生徒も見られた。

日本音楽に接する場を設定するという観点から、音楽選択の生徒たちによる箏の演奏を全校生徒の前で行う工夫をしてみたが、日ごろ、箏の演奏などほとんど目にしたことのない高校生には、友達が箏を演奏する姿は新鮮に映り、箏の日本的な音色とともに好感をもって受け入れられた。このことから、生徒たちの日本音楽や邦楽器に対する受容力は高いと考えられるが、邦楽自体のもつよさに慣れ親しんでいないため、授業に取り入れる際には配慮が必要である。

今後の課題としては、邦楽の多くの作品・演奏の中から、今の生徒たちにも理解できる美しさを探し出し、授業の中に取り入れていく必要がある。また、箏のみの活用で十分というものでもなく、生徒たちに尺八や三味線の実物を見せたり演奏したりするなどの活動を通して、日本音楽への興味・関心を広げることも大切である。

一方、箏の基本的な手法を学習した後に、その手法を更に工夫した創作や生徒の身近にあるリコーダーやピアノ、シンセサイザー等との合奏、二～三面の箏による創作合奏など箏を中心に色々な楽器による組み合わせにより活動の場を増やしていくことも課題として残った。

このようにして、よい演奏を多く聴いたり、実際に楽器に触れたりしていけば、生徒たちの心に日本音楽のもつよさを印象付けることは可能であろう。結局いいものと接することで、生徒は、そのよさを純真な曇りのない感性でとらえ、その奥底にある精神にまで気付くものである。それは、音楽のもっている素晴らしさであり、西洋音楽とか日本音楽とかいうジャンルを越えた音楽の力そのものであろう。そして、日本音楽をもっと生徒たちに近付けていけば、クラシック音楽と同様その古典的美しさ・素晴らしさをより生徒たちも理解し、より身近なものにとらえ、自分の生活にとり入れて行ってくれるのではないかと考える。

IV 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本年度は、音楽の授業において生徒が楽しく参加し、意義あるものと感じ、次の学習への期待がもてるような授業の在り方について研究を進めた。

このことは、授業を進めるうえで基本的なことであり、音楽科の教師全員が掲げる目標でもあり、そして、毎日の課題である。

しかし日々の授業の中では、この目標を実現する場合、多くの課題がある。そこで、授業が楽しく有意義なものとして生徒一人一人の心に残るためには、題材を越えて共通の解決への糸口があると考え、その糸口を見いだすための指導の工夫と改善について研究を進めることとした。そのために、音楽の授業では、体験がありそれが発展していくという構造から、「音楽に親しみ、音楽的視野を広げるための授業の在り方」と研究主題を設定した。

「音楽に親しむ」という行為や、「音楽的視野を広げる」という過程については、音楽にかかわる体験が、固定してその時点に停まるということなく、次に向けて発展しようとする力が働くものと考えられる。生徒がある音楽に親しみをもてば、自然と更に深い感動を求めたり、次の体験を求めたりするものである。また、感動体験から知識的理解への欲求が生まれ、視野の広がりをもたらす。そして、視野の広がり、親しみを更に深めたり、体験を広げたりしながら、更に感動を深め、視野を広げるという循環を繰り返していくものととらえられた。

また、「親しむ」と「視野が広がる」には、「深まり」と「広がり」の2方向への発展指向がある。その2方向は少しずつ移動しながら、更に発展し次の体験や知識理解を求め、相互に作用しあい、螺旋的な発展の過程を生じていく。この発展過程は、半ば自立的な動きであるが音楽の授業においては、教師の親しむための工夫や視野を広げるための適切な授業展開が必要となる。

授業実践において、「親しむ」ための工夫として、生徒が日常的に親しんでいる楽曲を活用し、目標の達成に向けた題材の工夫、電子機器等の生徒が興味・関心をもつ媒体の利用、本物の楽器の体験等を取り入れた。また、「視野を広げる」ことについては、音楽体験の深まりやより深い感動を体験することも含むものととらえた。知識を増やすだけでなく、音楽内容の感得、感動の深化も視野の広がりである。そこで、言語や視覚による伝達と習得のみならず、より深い音楽体験ができるようにするため、生徒主体による学習活動や自己評価・相互評価の活用等を授業の展開で取り入れた。このような工夫により、音楽に対する自信や意欲、表現力や集中力が高まり、音楽への興味・関心をもつようになった生徒も少なくない。

2 今後の課題

「親しみ」のためには、どのような題材が授業展開の動機付けとなる更に研究する必要がある。合わせて、どのような指導方法が有効であるかについても授業実践を通して追求していくことが課題として残った。また、「視野を広げる」ことを目標とすることについては、知識偏重の授業が中心となることのないよう、生徒主体の授業や課題学習などを取り入れた年間の指導計画を作成し、音楽自体を楽しむこととの均衡を図ることも課題である。